

情報操作と概念形成

情報社会における情報との関わりについての一考察

松川 利治

1 情報操作と概念形成

戦場において涙くむ子どもの顔を見たとき、人間はどのような感情を心に抱くのか？ 筆者が情報操作の危険性について関心を持つようになったのは大学において情報教育に関する事例研究のビデオを見てからのことである。ビデオはアメリカで作成されたものであり、そこにはマス・メディアをテーマにした情報リテラシーの授業風景が収録されていた。授業の目的は情報操作の危険性を体験的に学ぶことにより情報社会における情報との関わりについて考察を深めることであった。授業の内容は学生が番組を自主制作し模擬放送を行うことにより、送り手の立場からマス・メディアのしくみを経験的に学習するとともに、受け手の立場から情報との関わり方を再考するというものであった。授業の導入において情報操作の危険性に関心を抱かせるために、教師は撮影場所が戦場であるとい客観的事実を学生に教示しながら一枚の写真を提供した。被写体はテレビ画面でありブラウン管の向こうには涙くむ少年の顔があった。教師は写真の第一印象について発問し、大部分の学生が同情的な感情で応答した。学生たちは戦争をテーマに議論を重ね、結果的に被害者の立場から反戦を唱えるようになった。教師は提供した写真が加工されたものであることを告白し、加工前の写真を提示して少年の全体像を明らかにした。少年が黒光りする鉄の塊を胸に抱いていることを知ったとき、学生たちは少年が被害者ではなく加害者であることを理解した。

川上和久は『情報操作のトリック その歴史と方法』の中で情報操作を次のように定義している。

情報操作とは、情報の送り手の側から見れば、個人、もしくは集合的な主体が何らかの意図を持って、直接、もしくはメディアを介して、対象に対して意図した方向への態度・行動の変化を促すべく構成されたコミュニケーション行動とその結果の総体である。また、情報の受け手の側から見れば、意図的・非意図的によらず受け手の態度・行動に影響を及ぼすコミュニケーション行動、およびその結果の総体である。
(川上, 1994, pp. 16-17)

情報は送り手の意図に基づいて加工され、受け手の価値観に基づいて処理される。送り手が情報に与える意味と受け手が情報から読み取る意義は必ずしも同質のものではない(佐藤, 1987, pp. 8-15)。情報が有する客観的な事実は変わらないが、情報に与える主観的な解釈は千差万別である(岸田, 1987, pp. 25-30)。情報の質とは情報の価値である。情報は伝達の過程において主観的

な解釈に基づき質的な変化を遂げる。川上の定義によると、情報操作とは送り手の意図に従い受け手の価値観が方向付けられ態度・行動が変化することになる。いわば情報操作とは「情報に対する価値の同質化」を意味する。議論の展開とコメントの内容から推測すると学生たちの心境に何らかの変化が生じていたことがわかる。同様に筆者も心境の変化を自覚している。「少年」と「旅」を結びつけて「弱者」というレッテルを貼り、さらに「戦争」に関連付けて少年を「被害者」として誤認した。そして被害者の立場で否定的なイメージをふくらませることにより同情的な感情を抱くようになっていた。しかし情報を獲得することによって教師の真意を理解し事実が歪曲されていたことを認識したとき、心を支配していた同情的な感情が一瞬にして消失し、かわって複雑な感情が込み上げてきた。他者の意図的なはたらきかけに応じて自己の感情が無意識的に反応していることを自覚したとき、情報操作の危険性を実感した。

戦後、日本は資本主義の発展にともない「大衆社会」へと変貌を遂げた(石川, 1987, pp. 35-38)。マス・コミュニケーションの発達、大量生産、大量消費、組織の官僚化が生じ、大衆の政治参加の機会が拡張する一方で政治的無関心、個性の喪失、生活様式の画一化など様々な問題が顕在化している。また第一次産業から第二次産業、そして第三次産業へと産業構造が変化を遂げ消費領域が拡大することにより「消費社会」が形成された。経済の発展にともない所得が相対的に上昇し、サービス業の増大にともない遊びへの志向性が拡大した。生産者から消費者へと傾倒した国民は受身な態度をとるようになり受容的な姿勢を固持するようになった。さらに 21 世紀にはインターネットの普及などグローバルな情報技術の発展にともない「情報社会」が確立されつつある(成田, 2004, pp. 2-19)。大衆社会・消費社会において国民は受け手となり政治や経済など各分野の送り手から多種多様なメッセージ(意図)を獲得している。情報社会で生きるということは言わば価値の海を泳ぐということである。政治参加を促す政治的プロパガンダや大量消費を促す企業広告など情報に埋もれた日常生活において国民は自らの力で客観的事実を見極め、事実の歪曲を回避し、情報操作の危険性から真実をまもらなければならない(塚本, 1987, pp. 16-19)。

研究の目的は情報の質について検討することにある。科学性を重視して研究成果に一般性あるいは普遍性を要求する学問では論拠としてデータが採用されるが、論証の根拠となる情報自体の科学的な信憑性は明確にされていない。観察されうるあらゆる事実を現象としてデータ化する場合、数値化する過程において観察者(研究者)の主観的な情報処理が行われる。観察とは「物事の真の姿を間違いなく理解しようとしてよく見る」といふ行為であり、真実とは「嘘偽りのない、本当のこと」である。観察者の意図的な情報処理によって数値が操作された場合、数値化された情報は事実から乖離したものとなる。筆者は意識あるいは無意識に関わらず、研究者の意図的な情報操作によって事実が歪曲される可能性があるかと推測する。主観的に加工した情報を提供することによって他者が抱くイメージ(概念)を意図的に操作することが可能かどうかを調べる。

2 調査および研究方法の概要

研究のプロセスはアンケート調査とデータ分析に大別される。自作の資料を用いてアンケート調査を実施し、回答用紙から基礎データを抽出した。そして獲得した基礎データを用いてグラフを作成し、自作のグラフに基づいてデータの分析を行った。ここでは調査および研究方法の概要を解説し、研究の過程を明らかにするとともに、研究に込めた筆者の「意図」を明確にする。

2.1 提供資料の作成

アンケート調査に用いた自作の資料について、制作の過程とその意図を以下に記す。大衆社会において大衆は新聞・雑誌・ラジオ・テレビジョンなどを媒体として大量の情報を一方的に獲得するためにマス・メディアを介して情報操作を受けやすい。そこで回答者が日常生活において最も情報操作を受けやすい環境を想定するために提供する資料の情報源としてテレビ(媒体)、雑誌・書籍(媒体)、新聞(媒体)を設定した(図 2-1 参照)。

図2-1 媒体

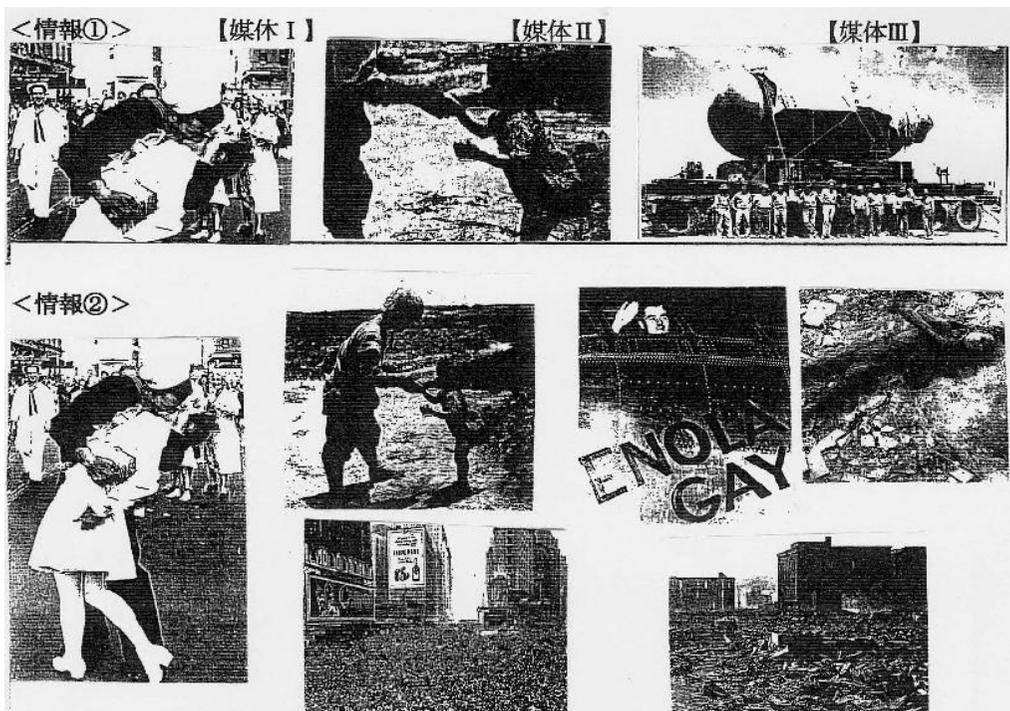


回答者に提供する情報は「戦争」に関連するものに限定した(徳山, 2004, pp. 32-42)。何故ならば戦時下においてマス・メディアが情報操作の道具として悪用されたとい歴史的事実が存在するからである(門奈, 2004, pp. 10-19)。竹山昭子は『戦争と放送』の中で戦争における情報操作の実相について言及している。ナチス・ドイツのヒトラーはマス・メディアを武器にファシストによる世界戦略を推進した。日本でも戦時下において放送は政府・軍部による国民統制の道具となった(竹山, 1994, pp. 20-23)。資料を作成するにあたり「戦争関連の情報として1997年に講談社から発行された『日録 20世紀 1945(昭和20年)』に掲載されている写真と記事を引用した。また竹山は情報操作の主な特徴としてプロパガンダ(宣伝)、シンボル操作、ディスインフォメーションを挙げている。プロパガンダとは主義・思想の宣伝を意味する。戦時下の放送は政府・軍部の情報伝達機関として機能した。シンボル操作とはスローガン、リフレインなどを意味する。放送で繰り返される言葉、ドラマの台詞、歌などは戦意高揚、戦争協力、選民意識の醸成のために操作された。ディスインフォメーションとは受け手にとって重要な情報を伝達しないというフェイク操作を意味する。戦況の悪

化、原爆の投下など国民にとって伝えるべき最も重要な情報が戦意喪失を懸念する軍部の意図によって操作された。情報を操作するにあたり 主義(立場)、 反復、 隠蔽を考慮した。

筆者は情報源をマス・メディア、情報のテーマを戦争に設定し、情報操作の3要素を考慮しながら写真と記事を意図的に加工して3枚の提供資料を作成した。以下、提供資料はそれぞれ情報、情報、情報と呼称する。情報操作の第一の特徴であるプロパガンダを意識し、受け手と送り手の立場を明確にした。勝利国、敗戦国、そして不関与の国(傍観国)である。媒体の情報は「勝利国」の立場、媒体の情報は「傍観国」の立場、媒体の情報は「敗戦国」の立場で情報を加工した。情報操作の第二の特徴であるシンボル操作を意識し、被写体(対象者・対象物)を強調した。媒体の被写体は「キスを交わす男女」、媒体の被写体は「兵士と少女」、媒体の被写体は「爆弾と人々」、「エノラ・ゲイ」、原爆ドーム、「焼け焦げた少年」である。被写体はすべて戦争を象徴するものであり、回答者の関心が戦争にむけられるように反復的に被写体の情報を提供した(図2-2参照)。情報操作の第三の特徴であるディスインフォメーションを意識し、情報開示の範囲を限定した。情報では戦争色を排除するように、情報ではロケーション(空間)を認識させるように、情報では直接的に戦争を意識させるように情報を加工した。提供資料が回答者に順次提供されるごとに戦争に関する情報が段階的に開示されるように情報を加工した(表2-1参照)。

図2-2 情報・情報 写真



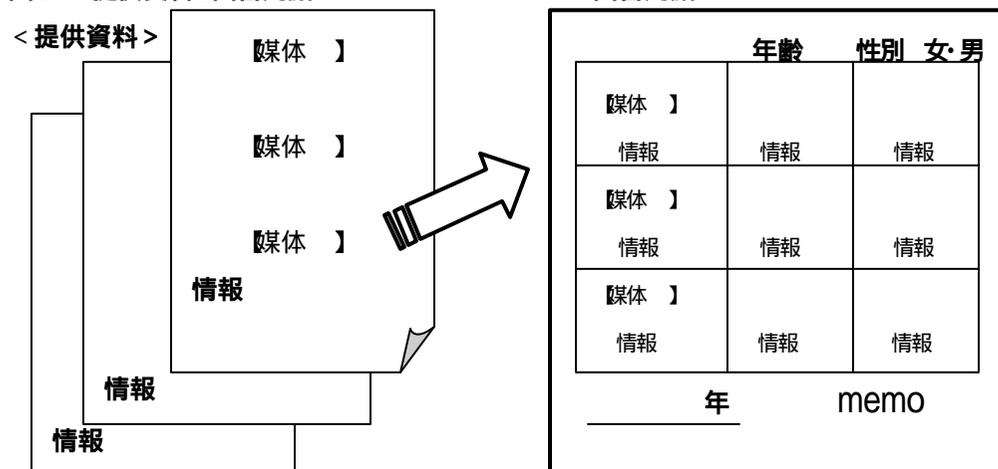
(出典) 講談社総合編集部, 1997, pp. 7-23 より作成

表2-1 情報 記事

< 情報 >

媒体	記事内容
【媒体】	<p>戦争が終わった!平和がやってきた!敵国は降伏。何十万というアメリカ国民は通りに広場に飛び出し、かつてない歓喜に酔いしれていた。これでもう死ぬことはない。夫を息子を戦場へ送ることはない。熱にうかされたようだった。兵士たちは手あたり次第、街行く若い女性を抱き寄せキスの雨を降らせた。古来、“愛の女神”が“戦の神”に口づける時、世界に平和が訪れるという。 (ニューヨークのタイムズ・スクエアにて)</p>
【媒体】	<p>「塹壕から救助された沖縄の少女(6月)」 沖縄県民は日本軍とともに敗走、塹壕の中で軍人とともに死んでいった。少女はおびえた目で米兵の差し出す水を飲んだという。(アメリカ国防総省)</p>
【媒体】	<p>長崎に投下された原子爆弾は「ファットマン」。プルトニウム爆弾で、直径1,52メートル、長さ3,25メートル、重さ4,5トン、TNT火薬22トンに相当。(ニュー・ヨークにて) 空の要塞「エノラ・ゲイ」のコックピットから手を振るポール・ティベッツ機長。B29は全長30メートル、最高時速585キロ、航続距離9350キロ。 被爆の翌日午後、市の本通りから見た爆心地付近。人影はなく、遠方に産業奨励館(原爆ドーム)が見える。(広島にて) 長崎の爆心地付近、瓦礫の中にあつた全身焼け焦げた少年。(長崎にて) (講談社総合編纂局, 1997, pp. 7-23より作成)</p>

図 2-3 提供資料と回答用紙



2.2 アンケート調査の実施および基礎データの収集

自作の提供資料を用いてアンケート調査を実施し、回答用紙から基礎データを抽出した。アンケート調査の手順と基礎データの作成方法を以下に記す。アンケートを実施するにあたり調査方法として質問紙法を採用した。自作の提供資料(3枚)と回答用紙(1枚)を配布し、事前に作成したマニュアルに従い自由に筆記してもらい、回答者の意向を最大限に尊重するために作業に関する情報以外は提供しない。情報には写真3枚、情報には写真6枚、情報には記事3点を、それぞれ媒体別に掲載した。回答用紙には縦横3列の回答欄が設定しており、縦列は左から情報・情報・情報、横列は上から媒体・媒体・媒体にそれぞれ対応している(図2-3参照)。作業工程(手順)は全体として5段階に分けられている。マニュアルの手順に従い提供資料に対する感想を指定の回答欄に記入してもらい、マニュアルの概要を以下に記す(表2-2参照)。

表2-2 マニュアル

作業工程	作業内容
【手順】	回答用紙の上部にアンケート実施日、年齢、性別を記入する。情報媒体がテレビ、雑誌・書籍、新聞であることを確認する。情報の写真を見ながら頭のなかに浮かんできたイメージを媒体別に回答用紙の左側縦列(3コマ)へ記入する。
【手順】	情報に情報の写真を加え、9枚の写真を媒体別に比較考察しながら頭のなかに浮かんできたイメージを媒体別に回答用紙の中央縦列(3コマ)へ記入する。
【手順】	情報および情報の写真に関連した記事として情報を提供する。情報および情報の写真に情報の文字情報を加え、9枚の写真と3点の記事を媒体別に比較考察しながら頭のなかに浮かんできたイメージを媒体別に回答用紙の右側縦列(3コマ)へ記入する。
【手順】	回答者に提供した情報はすべて同じ年(1945年)に世界で起きた出来事に関するものである。すべての情報を統合する共通のキーワードとして回答用紙の左側下部の空欄に出来事が生じた年(西暦)を推測して記入する。
【手順】	記入後、回答用紙を自己分析しながら他の回答者と内容について話し合う。最後に回答の過程において心境の変化があったかどうかを回答用紙の右側下部のMEMO欄へ記入する。

(回答者数 28 人/女性 13・男性 15)

アンケート調査終了後、回答用紙に記入された文章から基礎データを作成した。回答文から助詞や副詞を排除し、動詞を名詞に変換し、使用された言語を名詞および形容詞として抽出した。文章から抽出した単語(名詞・形容詞)の総数を媒体別に集計し「使用頻度」として数値化した。データ分析に用いるグラフはすべて基礎データの数値をもとに筆者が作成したものである。

筆者の意図を総括する。情報を操作するにあたり筆者が最も意識したことは、立場、反復、隠蔽である。媒体を3タイプに分類した理由は送り手の立場を勝利国、傍観国、敗戦国に大別したためである。立場の違いは視点の違いであり価値観の相異である。情報のテーマは「戦争」で統一されている。アンケート調査の結果、媒体ごとに回答者の心境に変化が見られた場合、送り手の意図に応じて受け手のイメージが変容したといえる。情報において資料を加工した理由は戦争色を隠蔽するためである。また提供資料を3枚に分類した理由は反復的に戦争関連の情報を提供することにより段階的に回答者の関心を戦争へ向けさせるためである。筆者の最大の意図は戦争の悲惨さを訴えるということではなく、送り手の意図に従い受け手の関心を戦争に向けさせ価値観を方向付けることが可能かどうかということ、「情報に対する価値の同質化」を生じさせることにある。

3 データ分析

基礎データに基づいて作成した自作のグラフを用いてデータの分析を行う。提供資料から直接的に読み取ったと推測される言語を客観的な事実として「外部情報」、一方、提供資料から間接的に読み取ったと推測される言語を主観的な解釈として「内部情報」と定義し、基礎データの数値を2系統に分類して2種類のグラフを作成した。つまり与えられた情報に対する直接的なイメージと与えられた情報をもとに回答者が自らつくりあげたと推測される間接的なイメージを大別し、それぞれの推移をグラフで表現したということになる。外部情報に基づく直接的なイメージの推移と内部情報に基づく間接的なイメージの推移を比較することにより、回答者の興味・関心の方向性および心境の変化を読み取り、提供資料の操作性について考察する。言葉は意味(概念)を表現するための道具であり心の代弁者である。媒体ごとに言語の使用頻度の推移を比較し情報操作の有無を検討するとともに、言語の推移から心境の変化を類推し情報操作と概念形成の相関について論じる。

3.1 外部情報に基づく概念形成

客観的な事実に基づいて形成されるイメージの推移について検討する。表象とは「知覚に基づいて意識に現れる外的対象の像」を意味する。対象が現存している場合は「知覚表象」、記憶によって再生される場合は「記憶表象」、思考によって想像される場合は「想像表象」と呼ばれる。換言すると知覚表象は眼前の対象を知覚することで形成されるイメージであり、記憶表象は過去に知覚した対象を再生することで形成されるイメージであり、想像表象は未知の対象を想像することで形

成されるイメージであるということになる。3 タイプのなかで純粋に客観的な事実に基づいて形成されるイメージは知覚表象である。提供資料から情報を獲得することにより、回答者はどのような知覚表象を心に抱いたのか。客観的な事実に関連する言語を基礎データから抽出しグラフを作成した。グラフの推移を比較分析することによって知覚表象の移り変わりを考察する。

媒体 について考察する(図 3-1 参照)。情報源はテレビで提供資料は写真 3 枚と記事 1 点である。媒体 における筆者の意図を説明する。受け手と送り手の立場は「勝利国」と仮定した。被写体は「キスを交わす男女」である。情報 では戦争色を排除するために被写体のみに焦点を合わせ余分な情報を削除した。情報 では被写体が置かれた「ロケーション(空間)」を意識して被写体の全体像を明確にした。情報 では「戦争」を強調した。「勝利国」、「キスを交わす男女」、「ロケーション(空間)」、「戦争」に関連する言語が多く使用された場合、筆者の意図に従い回答者のイメージがある一定の方向へ変化したことになる。情報 から情報 にかけて使用頻度の総数が 3 回以上の言語を基礎データから選出してグラフを作成した。グラフ下部の項目欄には使用頻度の高い言語が左から順番に配列されている。使用頻度の順位は(1)群衆、(2)戦争、(3)終戦、(4)キス、(5)恋人・カップル、(6)祭・パレード、(7)平和、(8)勝利、(9)兵士・水兵、(10)外国・海外、(11)ドラマ、(12)街中、(13)映画、(14)反戦、(15)世界である。情報 では「キス」の数値が最も高い。回答者が被写体の男女に注目していることがわかる。またドラマや映画などフィクションの世界を想定しているようであり戦争に関する記述はまったく見られない(図 3-1-1 参照)。情報 では「群衆」の数値が上昇している。「恋人」や「祭」など、回答者が提供された新たな情報に直接的に反応していることがわかる(図 3-1-2 参照)。情報 では「戦争」「終戦」の数値が急増している。「平和」「反戦」「勝利」など肯定的な言語が採用されている一方で否定的な言語は使用されていない。回答者は戦争に関心を寄せているが戦争の脅威に関しては無反応であるといえる(図 3-1-3 参照)。

媒体 について考察する(図 3-3 参照)。情報源は雑誌・書籍で提供資料は写真 2 枚と記事 1 点である。媒体 における筆者の意図を説明する。受け手と送り手の立場は「傍観国」と仮定した。被写体は「兵士と少女」である。情報 から情報 にかけての留意点は媒体 と同様である。「傍観国」、「兵士と少女」、「ロケーション(空間)」、「戦争」に関連する言語が多く使用された場合、筆者の意図に従い回答者のイメージがある一定の方向へ変化したことになる。使用頻度の順位は(1)子ども、(2)兵士・兵隊、(3)戦争、(4)救助、(5)写真、(6)飲み物、(7)少女、(8)戦場、(9)親子、(10)ミルク、(11)水、(12)書籍、(13)貧困、(14)敵国、(15)犠牲、(16)沖縄である。情報 では「子ども」の数値が最も高い。回答者が被写体の「少女」のみに注目していることがわかる。また回答者は「戦場」であること「子ども」が「飲み物」を飲んでいること、そして「貧困」の状態であることに着目している(図 3-3-1 参照)。情報 では「兵士」の数値が上昇している。回答者が提供された新たな情報に直接的に反応していることがわかる。被写体の全体像が明らかになることで兵士と少女の存在が認識され、両

者の関係へと回答者の関心が移行していることがわかる。また「救助」の数値が急増している。子どもを弱者(被害者)と仮定し弱者救済を支持している。回答者が戦争に対して第三者的な立場にあることがわかる(図 3-3-2 参照)。情報 では「戦争」「少女」の数値が急増している。「戦争」とい言葉は情報 から情報 にかけて段階的に上昇している。「敵国」「犠牲」「沖縄」など、戦争に対して否定的な言語が新たに発現している。回答者は戦争に関心を寄せているが媒体 とは異なり戦争の脅威に関して反応を示しているといえる(図 3-3-3 参照)。

媒体 について考察する(図 3-5 参照)。情報源は新聞で提供資料は写真 4 枚と記事 1 点である。媒体 における筆者の意図を説明する。受け手と送り手の立場は「敗戦国」と仮定した。被写体は「爆弾と人々」、「エノラ・ゲイ」、「原爆ドーム」、「焼け焦げた少年」である。情報 から情報 にかけての留意点は媒体 および媒体 と同様である。とりわけ勝利国と敗戦国との対立、戦争の脅威を演出した。「敗戦国」、「爆弾と人々」、「エノラ・ゲイ」、「原爆ドーム」、「焼け焦げた少年」、「ロケーション(空間)」、「戦争」に関連する言語が多く使用された場合、筆者の意図に従い回答者のイメージがある一定の方向へ変化したことになる。使用頻度の順位は(1)兵器・原爆、(2)戦争、(3)写真、(4)人々、(5)焼死少年、(6)広島・長崎、(7)巨大、(8)エノラ・ゲイ爆撃機、(9)物体、(10)街中、(11)死体、(12)投下、(13)反戦、(14)反核である。情報 では「写真」の数値が最も高い。写真とは記念写真のことである。回答者は被写体である未確認の物体に着目し、巨大な物体の前で人々が記念写真を撮影していると推測したようである。回答者がロケーションを「観光」とであると仮定したとすると戦争色は皆無といえる(図 3-5-1 参照)。情報 では「兵器・原爆」の数値が上昇している。また「焼死少年」「広島・長崎」「エノラ・ゲイ」など、回答者が提供された新たな情報に直接的に反応していることがわかる(図 3-5-2 参照)。情報 では「戦争」の数値が急増している。被爆地の実態が明らかになることで戦争への関心が高まっていることがわかる。原爆の威力に対して脅威を感じる一方、「反戦」、「反核」など敗戦国を擁護する立場が示されている。全体的にグラフの急激な変化はみられないが、とりわけ「戦争」の数値は情報 から情報 にかけて驚異的に上昇している。回答者のなかで戦争に対するイメージが支配的であるといえる(図 3-5-3 参照)。

各媒体には別個の資料を使用した回答者の反応には全体的に類似性がみられた。情報 では被写体に関する言語が多く使用され、情報 では被写体が置かれた空間(場所)、あるいは新たに提供された情報に関する言語が多く使用され、情報 では戦争に関する言語が多く使用された。つまり、筆者の意図に従い回答者のイメージが操作された可能性が高いといえる。客観的な事実に基づいて形成されるイメージは外部情報に依存するために外部からの情報操作を受けやすい。外部情報を思考の材料として採用する場合、外部情報を鵜呑みにするのではなく、獲得した情報の実証性を批判的に吟味するように心がけることが重要であるといえる。

3.2 内部情報に基づく概念形成

主観的な解釈に基づいて形成されるイメージの推移について検討する。知覚表象、記憶表象、想像表象のなかで純粋に客観的な事実に基づいて形成されるイメージは知覚表象である。一方、主観的な解釈に基づいて形成されるイメージは記憶表象および想像表象である。提供資料から情報を獲得することによって回答者はどのような記憶表象あるいは想像表象を心に抱いたのか。提供資料から間接的に読み取ったと推測される言語を主観的な解釈として基礎データから抽出しグラフを作成した。グラフの推移を比較分析して記憶表象および想像表象の移り変わりを検討する。

媒体 について考察する(図3-2参照)。情報源は「テレビ」、立場は「勝利国」、被写体は「キスを交わす男女」である。使用頻度の順位は(1)喜、(2)力、(3)楽、(4)憧、(5)嫌、(6)奇、(7)驚、(8)愛、(9)恥、(10)危、(11)安、(12)その他、(13)苦、(14)恐、(15)惜、(16)無、(17)困、(18)希である。情報 では「力(勇気・躍動感・強圧)」と「憧(羨望・素敵)」が最も高い。また喜(幸福・喜び)、楽(楽しさ)、嫌(嫌悪感)、奇(興味・めずらしさ)、驚(驚き)、愛(愛情・微笑ましさ)、恥(大胆)、苦(苦しさ)などが使用されている。全体的に数値は低く肯定的なイメージを想起させる言語が多く使用されている。回答者の感情は抑制され快を示しているといえる。回答者は男女に注目し、ドラマや映画などフィクションの世界を想定しながら、力強さや憧れを抱いていたとみられる(図3-2-1参照)。情報 では「楽(楽しさにぎやかさ)」が上昇し、全体の数値は低下している。図3-1-2によると「群衆」が急増している。回答者の関心が新たに提供された外部情報に向けられたために内部情報に関する言語が全体的に減少したと推測する。回答者は群衆に注目し、パレードや祭を想定しながら、楽しさを感じていたとみられる(図3-2-2参照)。情報 では「喜(幸福・満足・喜び)」が急増している。安(安心感)、その他、恐(恐怖感)、惜(無念)、無(脱力感)、困(困難)、希(願い)が新たに加わっている。図3-1-3によると回答者は戦争に関心を寄せながら戦争の脅威に関しては反応していないことがわかる。しかし内部情報を分析すると戦争の勝利に対して幸福を抱きながら心のどこかで戦争に対して否定的なイメージを抱き不快を感じていたことがわかる(図3-2-3参照)。総じて媒体 は否定的なイメージより肯定的なイメージのほうが強く発現しているといえる。

媒体 について考察する(図3-4参照)。情報源は「雑誌・書籍」、立場は「傍観国」、被写体は「兵士と少女」である。使用頻度の順位は(1)恐、(2)悲、(3)愛、(4)省、(5)喜、(6)無、(7)哀、(8)優、(9)憂、(10)その他、(11)孤、(12)歪、(13)希、(14)刹、(15)誤、(16)正、(17)解、(18)驚、(19)安、(20)感、(21)疑、(22)痛である。情報 では「愛(愛らしさ・微笑ましさ)」が最も高い。また、省(反省)、哀(かわいそう)が使用されている。全体的に数値は低く慈愛に満ちた言語が多く使用されている。感情は同情的であり不快を示しているといえる。回答者は少女に注目し、戦場を想定しながら、愛情、慈愛といった感情を抱いていたとみられる(図3-4-1参照)。情報 では「恐(恐怖感)」、「悲(悲惨・悲劇)」、「優(優しさ)」、「無(喪失感)」、「孤(孤独)」が上昇し、「愛」、「皆」、「哀」が喪失している。図

3-3-2 によると「兵士・兵隊」が急増している。回答者の関心が新たに提示された情報に向けられていることがわかる。「愚」や「悲」は戦争や死など兵士から連想される否定的なイメージによるものとみられる。また「救助」、「ミルク」といった言語が多く使用されていることを考慮すると「優」といふ感情は兵士の保護活動から連想される肯定的なイメージによるものとみられる。回答者は子どもに注目し、戦場での孤独を想定しながら、恐怖感、悲惨さ、喪失感、あるいは優しさ、孤独感といった複雑な感情を抱いていたとみられる(図 3-4-2 参照)。情報 では「愚(恐怖感)」と「喜(満足感)」が急増している。全体的に数値は低いが言語の多様化がみられる。図 3-3-3 によると回答者が傍観国の立場で被写体を観察していること、また情報を獲得するたびに戦争に対するイメージが増大していることがわかる。少女が保護されたことに対して喜びを抱きながら少女を孤独にした戦争に対して否定的なイメージを抱き不快を感じていたことがわかる(図 3-4-3 参照)。総じて媒体 は否定的なイメージと肯定的なイメージが混合し複雑な感情が強く発現しているといえる。

媒体 について考察する(図 3-6 参照)。情報源は「新聞」、立場は「敗戦国」、被写体は「爆弾と人々」、「エノラ・ゲイ」、「原爆ドーム」、「焼け焦げた少年」である。使用頻度の順位は(1)悲、(2)酷、(3)その他、(4)驚、(5)恐、(6)無、(7)喜、(8)瞬、(9)憧、(10)嫌、(11)怒、(12)力である。情報 では「驚(大きさ)」が最も高い。また「無(埋没)」、「喜(達成感)」、「憧(かっこいい)」が使用されている。全体的に数値は低く否定的なイメージを想起させる言語は少ない。驚と喜が多く使用されている。図 3-5-1 によると回答者が記念撮影を想定していることがわかる。驚は被写体の規模に対する感情であり、喜は記念に対する感情であるとみられる。感情は高揚し快を示しているといえる。回答者は巨大な物体に注目し、観光地を想定しながら、驚き、喜びといった感情を抱いていたとみられる(図 3-6-1 参照)。情報 では「悲(悲劇)」、「酷(残酷)」が上昇し「驚」、「喜」、「憧」が喪失している。図 3-5-2 によると回答者が「焼死少年」、「広島・長崎」、「エノラ・ゲイ」、「街中」、「死体」、「投下」、「破壊」など新たに獲得した情報に着目していること、爆心地の実態が明らかになるにつれて戦争への関心が高まっていることがわかる。情報 では肯定的なイメージが想起され、一転して情報 では否定的なイメージが回答者の心を支配している。新たな情報に感情が揺れ動かされたことがわかる。回答者は戦況に注目し、戦場での悲劇を想定しながら、悲惨さ、残酷さ、恐怖感、落胆、嫌悪感といった感情を抱いていたとみられる(図 3-6-2 参照)。情報 では「悲(悲劇・悲惨)」、「酷(残酷)」、「恐(恐怖感)」、「その他」、「無(夢さ消滅)」が急増している。また「驚(大きさ)」、「瞬(一瞬)」、「怒(怒り)」、「力(脅威)」が加わり、全体的に数値が増加している。図 3-5-3 によると回答者が原爆の威力に対して脅威を感じ、一方で敗戦国を擁護する姿勢を示していること、戦争に対する否定的なイメージが支配的であることがわかる。項目数が少なく特定の言語の使用頻度が高い。内部情報を分析すると回答者の感情が否定的なイメージによって統合的に操作されていることがわかる(図 3-6-3 参照)。総じて媒体 は否定的なイメージに包まれ悲観的な感情が強く発現しているといえる。

媒体において情報では幸福感、力強さ、憧れ、情報では楽しさ、にぎやかさ、情報では幸福感、恐怖感が使用された。全体的に否定的なイメージより肯定的なイメージが強い。媒体において情報では愛情、慈愛、情報では恐怖感、悲惨さ、喪失感、優しさ、孤独感、情報では恐怖感が使用された。全体的に否定的なイメージと肯定的なイメージが混合し複雑な心境がうかがわれる。媒体において情報では驚き、情報では悲惨さ、残酷さ、恐怖感、落胆、嫌悪感、情報では悲惨さ、残酷さ、恐怖感、はかなさが使用された。全体的に否定的なイメージに包まれて悲観的な感情が強く発現している。媒体間における共通点は、情報から情報にかけて情報量の増加に比例するように言語の使用頻度が段階的に増加し、言語が多様化し、結果的に回答者の内的な解釈が「恐怖感」に帰着しているということである。筆者は情報から情報にかけて回答者の関心が戦争にむけられるように意図的に情報を加工した。恐怖感の起源が戦争に基づく否定的なイメージであると仮定した場合、情報操作が行われた可能性は非常に高い。感情は対象を認識することで多様化する。感情の多様化は考え方(解釈)の相異につながる。断片的な情報を獲得し対象を限定的にとらえるのではなく様々な情報を総合的に分析し多角的な視点で物事を考えるということは情報操作を回避するうえで有効であるといえよう。

3.3 情報操作と概念形成の相関性

送り手の意図に従い受け手の関心を戦争に向けさせ価値観を方向付けることが可能かどうか。筆者の最大の意図は「情報に対する価値の同質化」を生じさせることにあった。情報を操作するにあたり筆者が最も意識したことは立場、反復、隠蔽である。提供資料はすべて「戦争」に関連したものである。情報において情報を加工し戦争色を隠蔽した。また提供資料を3枚に分類し反復的に戦争関連の情報を提供することにより段階的に回答者の関心を戦争へ向けさせた。外部情報に基づく概念の推移をみると、回答者の関心が段階的に戦争に向けられていることがわかる。筆者の意図によって回答者の関心が誘導されているといえよう。媒体を3タイプに分類し情報の内容を性質別に分化することにより立場を勝利国、傍観国、敗戦国に大別した。立場の違いは視点の違いであり価値観の相異である。内部情報に基づく概念の推移をみると、媒体では肯定的なイメージ、媒体では肯定的なイメージおよび否定的なイメージ、媒体では否定的なイメージが支配的であることがわかる。筆者が意図したイメージと回答者が抱いたイメージが共鳴しているといえよう。データを分析した結果、全体として言えることは情報を獲得するにつれて戦争に関する関心が高まり感情が多様化しているということ。そして情報の質にとまらぬ感情の性質が変容しているということである。ともに戦争をテーマにしながら、媒体ごとに感情の質的な相異がみられる。提供資料には操作性があり、筆者の意図と回答者の心境には相関性があったと帰結する。

図 3-1 外部情報に基づく概念の推移(1)

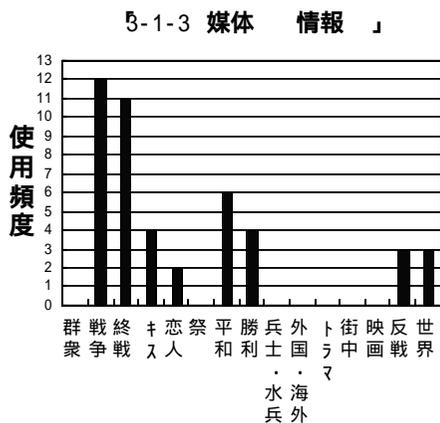
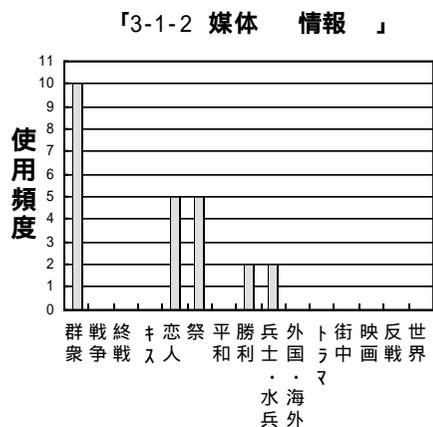
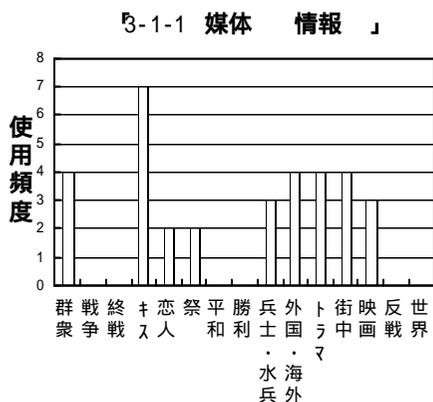


図 3-2 内部情報に基づく概念の推移(1)

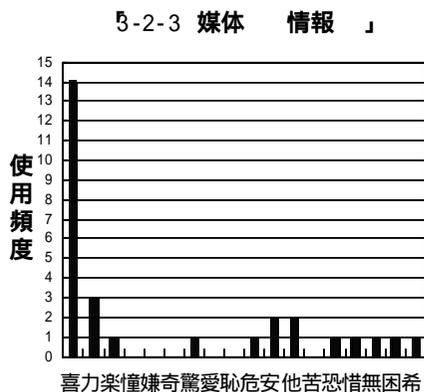
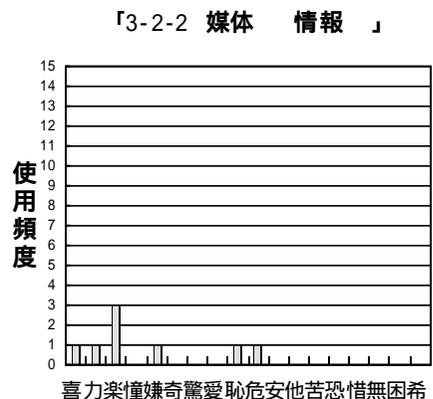
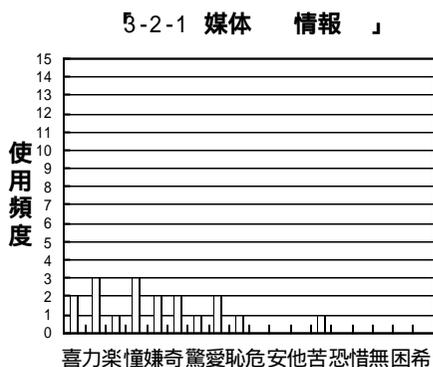
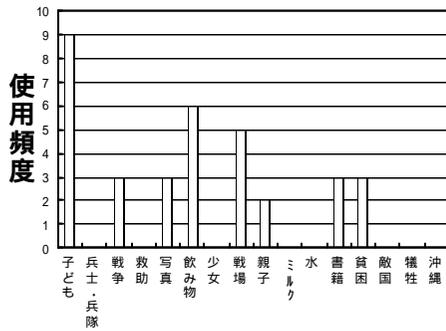


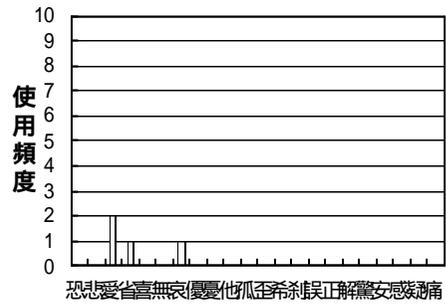
図 3-3 外部情報に基づく概念の推移(2)

図 3-4 内部情報に基づく概念の推移(2)

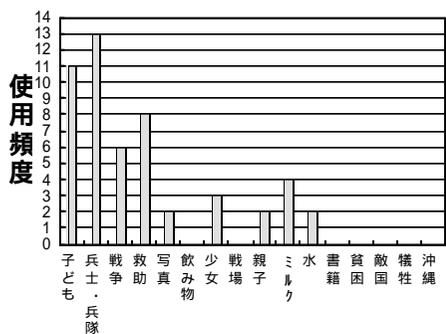
3-3-1 媒体 情報」



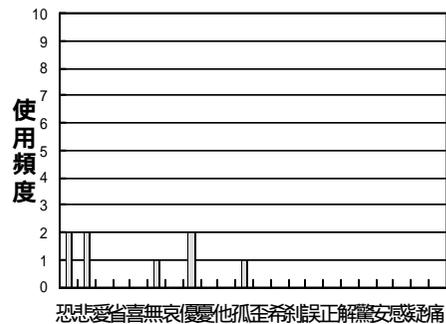
「3-4-1 媒体 情報」



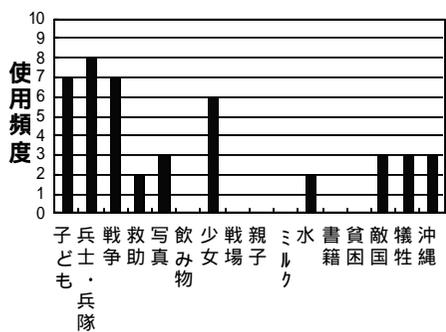
3-3-2 媒体 情報」



「3-4-2 媒体 情報」



「3-3-3 媒体 情報」



「3-4-3 媒体 情報」

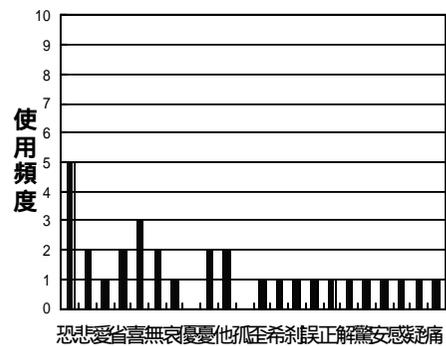
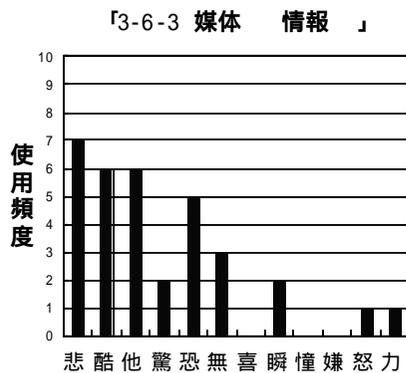
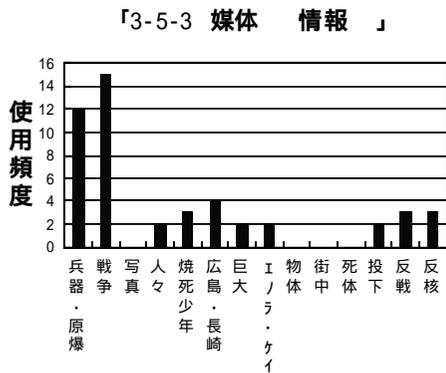
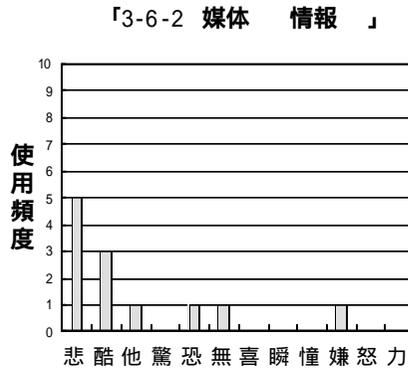
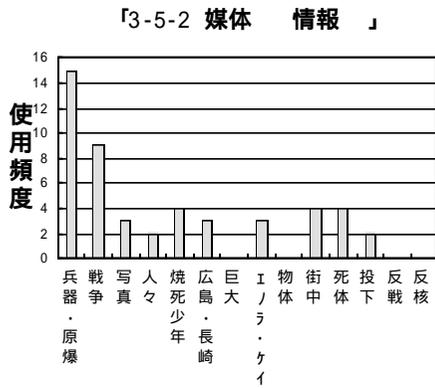
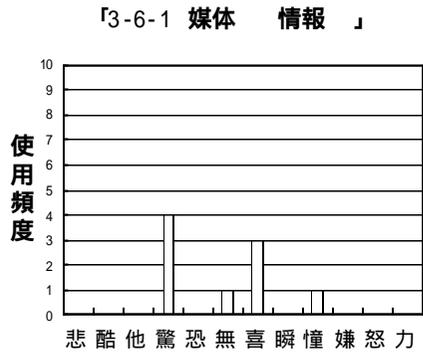
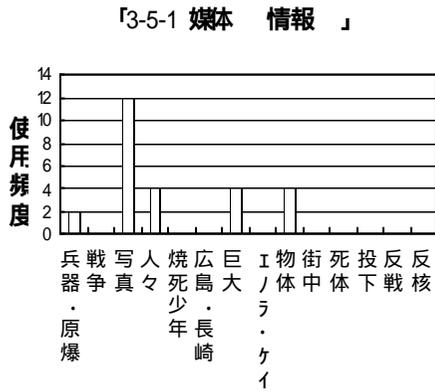


図 3-5 外部情報に基づく概念の推移(3)

図 3-6 内部情報に基づく概念の推移(3)



4 情報操作のプロセス

外部情報および内部情報に基づく概念の推移を比較分析した結果、情報操作と概念形成の間に相関があることを確認した。アンケート調査において情報操作が行われた可能性は非常に高い。筆者の意図に従い、回答者の関心はいかにして戦争へと誘導されたのか。基礎データを巨視的な視点で分析し、回答者の動向を総合的にとらえ、情報操作のプロセスを多角的に考察する。

4.1 外部情報と内部情報の推移

客観的な事実と主観的な解釈の関係性について考察する。外部情報に関連する言語と内部情報に関連する言語を基礎データから抽出し、それぞれの総数を使用頻度として数値化し、折れ線グラフを作成した(図 4-1 参照)。アンケート調査の過程において、回答者は客観的な事実に基づいてイメージを形成したのか、それとも主観的な解釈に基づいてイメージを形成したのか。外部情報および内部情報に対する回答者の志向性について検討する。

媒体 を分析する(図 4-1-1 参照)。情報 から情報 にかけて外部情報および内部情報の数値がともに減少している。情報 と情報 の内容が類似しているために回答者の反応が抑制されたのではないかと推測する。情報 から情報 にかけて内部情報が飛躍的に上昇している。主観的な解釈に基づいて回答者の感情が大きく変化していることがわかる。媒体 を分析する(図 4-1-2 参照)。情報 から情報 にかけて外部情報が急激に上昇している。回答者が客観的な事実として新たに提供された情報に対して関心を寄せていることがわかる。情報 から情報 にかけて外部情報が減少し、内部情報が飛躍的に増加している。情報 では客観的な事実に関心を寄せ、一転して情報 では主観的な解釈に基づき感情を高揚させていることがわかる。媒体 を分析する(図 4-1-3 参照)。情報 から情報 にかけて外部情報の上昇率は一定している。回答者が新たに提供された情報に対して直接的に反応していることがわかる。情報 から情報 にかけて内部情報の増加が著しい。提供資料に興味・関心を抱きながら、同時に感情が強く高揚していることがわかる。

外部情報と内部情報の推移について全体的な特徴を述べる。回答者は内部情報(主観的な解釈)より外部情報(客観的な事実)に依存している。新たな情報を獲得するたびに言語の使用総数が増加し、主観的な解釈へ傾倒することによって感情が多様化している。つまり、回答者は情報を獲得することにより客観的な事実に関心を寄せ、同時に主観的な解釈に傾倒することにより内的な感情を段階的に高めているといえる。

4.2 使用語彙の構成要素

使用語彙の構成要素について考察する。回答者は提供資料のどこに焦点を合わせてイメージを形成したのか。人間は対象(人および物)を認識する場合、時間、空間、そして状態を考慮する。回答文で使用された言語を When(時間)、Where(空間)、Who(対象者)、What(対象物現象)、How(感情・様態)に分類し、棒グラフを作成した(図 4-2 参照)。何に着目し、何を考え、何を感じたのか。自作の棒グラフを分析して回答者の心の動きを推測する。

媒体 を分析する(図 4-2-1 参照)。情報 から情報 にかけて時間、空間、感情が減少し、対象者および対象物が増加している。新たな情報として被写体に着目していることがわかる。情報 から情報 にかけて対象者が減少し、対象物および感情が飛躍的に上昇している。写真上の物体・現象、あるいは記事の内容に関心を示し、感情を高めていることがわかる。回答者は情報 において「キスを交わす男女」に注目し、情報 において「群衆」や「パレード」に焦点を移行し、情報 において「戦争」へ関心を寄せることにより恐怖感を抱くようになった、といえよう。媒体 を分析する(図 4-2-2 参照)。情報 から情報 にかけて対象者および対象物が飛躍的に上昇している。新たな情報として被写体に強く反応していることがわかる。情報 から情報 にかけて対象者および対象物が減少し、感情が急激に増加している。記事の内容にふれ感情が高揚していることがわかる。全体的に対象者および対象物の数値が均衡を保っている。他の媒体と比較して対象者の数値が高いことを考慮すると対象者である少女に強い関心を寄せていることがわかる。回答者は情報 において「少女」に着目し、情報 において「兵士」に焦点を移行し、情報 において「戦争」へ関心をよせることにより恐怖感を抱くようになった、といえよう。媒体 を分析する(図 4-2-3 参照)。情報 から情報 にかけて段階的に対象物が激増している。情報 から情報 にかけて感情が減少しているのは、新たな情報として複数の被写体が提示され関心が外部情報に集約されたためであると推測する。一方、情報 から情報 にかけて感情が上昇している。情報 で戦争の実態を認識し、情報 で核兵器の脅威を想定したために恐怖心が芽生えたとみられる。他の媒体と比較して対象物および現象の数値が高いことを考慮すると戦況に強い関心を寄せていることがわかる。回答者は情報 において「巨大な物体」に着目し、情報 において「原爆」に焦点を移行し、情報 において「戦争」へ関心を寄せることにより恐怖感を抱くようになった、といえよう。

回答者の心の動きについて特徴を述べる。全体的に対象者および対象物が高く、時間および空間が低い。被写体には関心があるが被写体が置かれた環境に関しては無関心のようなものである。被写体に反応している。新情報に興味を抱いているといえる。被写体は対象者と対象物に大別される。前者は情報 で上昇し情報 で減少している。後者は情報 から情報 にかけて段階的に増加している。回答者は情報 で被写体に心引かれ、情報 で新情報に感化され、情報 で戦争の恐怖に包まれたとみられる。総じて筆者の意図と回答者の心の動きは同調しているといえる。

図 4-1 外部情報と内部情報の推移

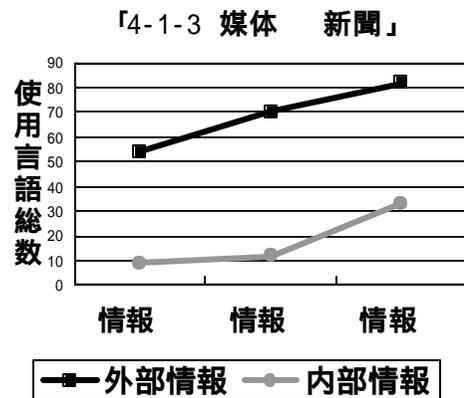
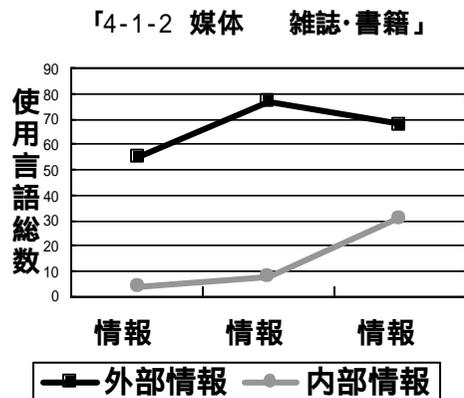
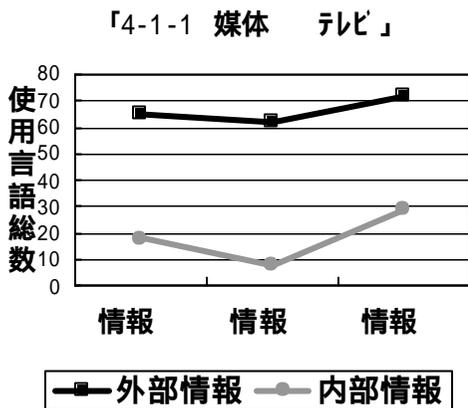
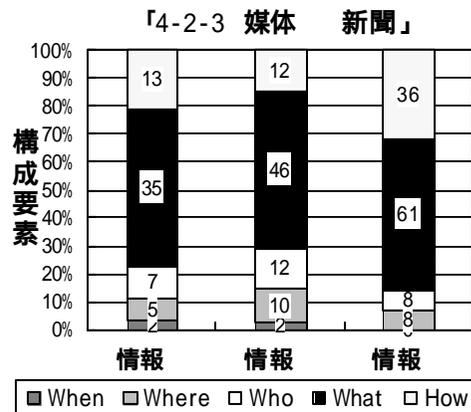
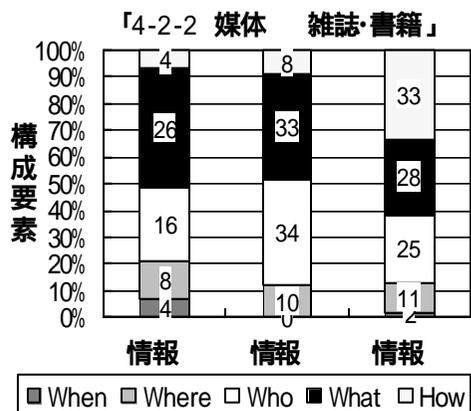
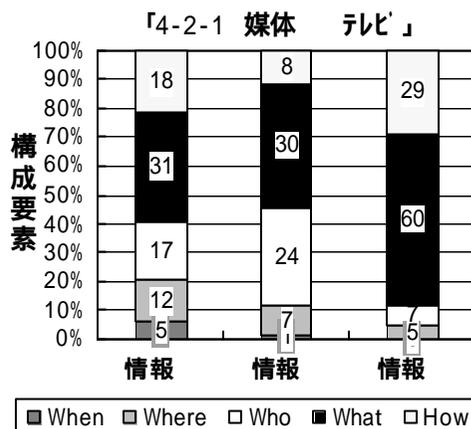


図 4-2 使用言語の構成要素



5 情報の量と情報の質

アンケート調査の過程において回答者はどのように心境の変化を自覚していたのか。調査終了後、回答者に回答文を自己分析するように教示し、作業を振り返りながら調査内容について会話するように指示した。回答者は自己分析の結果と他者の意見を参考にしながら回答用紙のMEMO欄に感想を記入した。感想文を比較分析すると回答者の主張には類似性がみられた。多くの回答者が「断片的で曖昧な情報が統合されることにより明確な意味が浮き彫りになった」と述べている。受け手が情報から読み取った意味とは「戦争」である。送り手の意図は受け手の関心を戦争へ誘導することであった。データを分析することによって情報操作の痕跡を確認することができた。おわりに情報操作の危険性に言及し、情報の量および情報の質について筆者の見解を述べる。

アンケート調査において回答者は複数の情報を獲得することにより「戦争」という共通のテーマを見出した。初期段階において客観的な事実に依存していた受け手は獲得した情報を総合的に評価することにより対象を認識し、コミュニケーションをはかることにより感情を多様化させ、対象を主観的な解釈に基づいて多角的に批判することにより認識を深化させた。情報量が増加するほど対象に対する理解度は高まる傾向にある。一方、情報量が減少するほど対象に対する不確定要素は強化される。送り手が情報の内容を意図的に限定した場合、対象に関する不確定要素が高まり受け手は断片的な情報を過信して事実を歪曲してとらえる危険性がある。

情報を扱う人間、情報のテーマ、情報の量が同一であるにもかかわらず、媒体ごとに情報に対する評価が異なっている。媒体では「喜び」を感じ、媒体では「哀れみ」を抱き、媒体では「悲しみ」に支配されている。媒体は情報の質の相異に基づいて大別されている。受け手の評価は情報の質に応じて多様化したとみられる。人間は眼前の物理的な現象を客観的な事実として情報に変換し、主観的な解釈に基づいて意味付けや価値付けを行う。送り手は客観的な事実を主観的な解釈に基づいて情報化し、受け手は提供された情報を主観的な解釈に基づいて評価する。送り手と受け手の間で唯一変わらないのは客観的な事実である。情報の本質とは情報化された客観的な事実といえよう。一方、送り手と受け手の間で変わるのは主観的な解釈である。情報の意義や価値は情報を扱う人間の主観に応じて変容する。情報の質は客観的な事実に対する個人の意味付けや価値付けによって変化するといえよう。情報を評価せずに提供された情報に依存している状態で受け手の真意を推測することは困難である。受け手が情報に対し受動的な立場にある場合、受け手の主観が排除され、受け手は送り手の主観に操作され事実を歪曲してとらえる危険性がある。

情報操作の危険性は「思想統制」にある。一部の人間の意図的な操作により複数の人間の思想が制限的に統御され、個人の態度・行動が画一的な価値観で支配される。大衆社会において国民は消費者となり受身一辺倒の暮らしを余儀なくされる。情報量が飛躍的に増加する情報社会において断片的な情報から事実を見極めるためには情報の質を批判的に考察する必要がある。

引用文献

- 石川弘義(1987). 「“大衆社会”の理論史 文献スケッチから (特集マスコミを学」ぶ - 「マスコミ」に学
ぶ)」。総合ジャーナリズム研究所編『総合ジャーナリズム研究 通巻121号』。東京: 東京社。
- 川上和久(1994). 『情報操作のトリック その歴史と方法』。東京: 講談社。
- 岸田功(1987). 「“放送”を学ぶ基礎 受け手の関心によって多様なアプローチが… (特集マスコミ
を学」ぶ - 「マスコミ」に学ぶ)」。総合ジャーナリズム研究所編『総合ジャーナリズム研究 通
巻121号』。東京: 東京社。
- 講談社総合編集部(1997). 『日録20世紀1945(昭和20) 第3号』。東京: 講談社。
- 佐藤智雄(1987). 『マス・メディアめがね論 研究対象の二重構造とさまざまな現実問題 (特集マス
コミを学」ぶ - 「マスコミ」に学ぶ)』。総合ジャーナリズム研究所編『総合ジャーナリズム研究
通巻121号』。東京: 東京社。
- 竹下昭子(1994). 『戦争と放送』。東京: 社会思想社。
- 塚本三夫(1987). 「“コミュニケーション”をどうとらえるか 課題と方法 (特集マスコミを学」ぶ - 「マ
スコミ」に学ぶ)』。総合ジャーナリズム研究所編『総合ジャーナリズム研究 通巻121号』。東
京: 東京社。
- 徳山喜雄(2004). 『戦争報道 問われる“残酷写真”の扱い (特集メディアの壁2)』。岡本行正編
『朝日総研レポートAIR21 通巻173号』東京: 朝日新聞。
- 成田康昭(2004). 『インターネット社会 ネットワーク時代の“ジャーナリズム” (特集メディアの壁
2)』。岡本行正編『朝日総研レポートAIR21 通巻173号』。東京: 朝日新聞。
- 門奈直樹(2004). 『情報操作疑惑 英ハットン報告書はメディア界に何を残したか (特集メディアの
壁2)』。岡本行正編『朝日総研レポートAIR21 通巻167号』。東京: 朝日新聞。